

如く自己の經歷を第三者の地位より観て、冷然としてそれを批評する態度に出たのであるか。著者にして若し將來作家として世に出づる覺悟があるならば、是の點に就て明瞭なる自覺を有さなければならぬと我輩は思ふのである。

◎殊に我輩が是の『あらひ髪』に於て最も遺憾とするのは、其の文體や詞藻や結構などの點よりも、寧ろ主人公たる出見の行爲を是認するに足るべき十分の理由の言ひ表はれざる一點にある。我が友竹風は戯作者ではない、東隣西家の俚談を寫し出だして小説と稱する所謂の寫實家の一輩では無い。其の作には必ずや主張がなければならぬ。而して其の主張をば彼れは是の『あらひ髪』に於て何處に表はして居るか。出見は世間の非難を被り、友人の忠言を受け、其の老父の苦諫を耳にして、自家從來の行爲に對して一點悔悟の念を起し得ない。起し得ないのみならず、自己の中心には飽く迄是を是認して居る。著者の主張、大きく言へば人生觀は是の點に集中して居るのである。是の一段即ち是れ是の一篇の精神主腦である。是れ無くも『あらひ髪』の一篇は徒らに紅恨紫怨を物語れる一戀愛小説たるに過ぎない。著者が是の點に就いて十分の自覺を有せることは我輩の堅く信じ

て疑はざる所である。

◎然るに事實に於て『あらひ髪』は殆ど是の點を閑却して居るの觀あるは實に不思議である。『己れには如何にしても後悔の念が浮ばぬ』とばかりにて何故に悔ゆることを知らざるかの肝腎な理由に至つては一言も述ぶる所がない。是の如くにして出見の行爲は全く其のジャスチフィケーションを失ひ、『あらひ髪』の一篇も亦茲に全く其の精神を失ひ、著者の作意も全く空茫に歸したつたのである。あゝ文字や體制や竹風にとりて何物でも無い。是の精神、是の主張にして遺憾なく發揮せられたらむには、『あらひ髪』は其のあらゆる缺點を以てして猶ほ且つ生命ある文字たるを失はなかつたのである。我輩はくれぐれも竹風の爲に是を惜む。

◎近刊の多くの小説の中で、永井荷風の『地獄の花』は儘に出色の文字であらう。素より缺點の數ふべきものが無いでは無いが、この缺點は青春の活氣に伴ひて、一面其の長所と離れがたきものなることを想へば、むしろその愛すべきを覺ゆるのである。總じて全篇の文字活氣に充ち、其の筆の尖には青年の熱き血汐が紙背を徹して滴つて居る。わか／＼しいと云ふ批難もあるであらうが、このわか

い、いい處にあらゆる將來の希望が籠つて居るのである。我輩は是れまで多くの青年作家の著述を讀まされたが、是の『地獄の花』に於て初めてまことの青年らしい情熱と意氣と才思とを認め得たのである。

◎著者は是の『地獄の花』に於て一種の主張を言ひ表はさむと力めたるは明かなる事實である。我輩は決して是れを批難するものではないが、世上の凡庸作家に往々見る所の如く、唯是の主張を發揮するに急なるが爲に、他方に於て人物事件の上には有害なる拘束を加へたるの弊が現はるに至つては、甚だ好ましくない事と云はなければならぬ。著者は言ふまでも無く、ゾラの作に精通せる事であらう。彼れは一種の主張を以て其の筆を執つたものであるが、其の所謂の主張なるものが具體的事相を假らずして、赤裸々に紙上に陳述せられたる如き場合は決して無かつた。況して是の主張の爲に性格もしくは事件の自然的開展を犠牲としたる如きは、想ひもよらぬ事であつた。彼れが其の小説を作る時は、其の眼中には人物の性格と境遇との二つあるのみ。是の二つの者が交錯貫通して初めて小説的事件の開展を見るのである。所謂の主張は彼れ自らの人格に存するが故に、故らに

是を言ひ表はさずとも、其の觀察の中に、其の文字の中には、又其の全體の精神の中に、ちのづから發揮せらるゝのである。斯くして一面に於ては能く自然主義の旗幟を打立つると共に、他面に於ては又能く理想主義の幔帳を掲げ得たのである。我輩は荷風君が是の事を一考せむことを希望する。

◎『地獄の花』は其の主張を言ひ表はすに於て、餘りに赤裸々であつた。是の主張の骨が目立つに随つて、自然の皮肉は如何にも瘦せ衰へて見ゆる。自然主義はあらゆる理想を包容しても決して、狹隘を感じずべきものでは無い。我輩は『地獄の花』に於て慥に著者の最も有望なる將來を認識するが故に、ことさらには是の苦言を先づ批評の辭に代ゆるのである。

◎近來我邦の批評家の中には頻りに魯西亞文學排斥の聲を揚ぐるものがあるが、我輩には一向其の理が解らない。

◎今日トルストイは老耄して居るかも知れぬ。如何にもドストエフスキは癲癩病者で、ゴルキは浮浪漢であつたとしても、其の文學をば何故に排斥せむとするのであるか。吾々は聖書として文學を見るの要は無い、唯一部人生の批評とし

て吾人の精靈に安慰と希望を與ふる一句半句の文字だにあるならば、尙ほ取つて、吾人の糧とするものが出来るのである。

◎十九世紀の文明がトルストイを産せむが爲めに如何なる高價を拂つたか。

吾人は是の偉人を言ふ前に先づ是の問題を熟考しなければならぬ。彼れの主義

を是非し彼れの行爲を批評するは極めて容易の事である。然しながら其の「識悔

録」と其の「吾宗教」とを讀みて是の偉人が身讀體達したる人生の徑路の如何なるも

のであつたかを考ふるならば吾人は肅然として自ら畏るゝ所無きを得ない。

◎ゴルキを罵りて野獸の如く卑む人があるが彼れはゴルキに於て果して何物

を見たのであるか。ツェルカツセやボシツクに於て所謂の浮浪主義の權化を見た

るの故を以て彼れは爾かく吾人に忌み嫌はるべきものであるか。あい所謂の批

評家の鑑識は何故にかくまで狭少であるか。

◎吾人は文明の批評家として其の所謂の浮浪主義に大膽なる發聲を與へたる

聲にゴルキを偉なりとするものがある。十九世紀文明の大なる缺陷の一つは是の發

聲によりて人々の胸中に明白なる自覺を喚び起したのである。古人の言へる如

く、咀ひは多くの場合に於て救ひであるとするれば人々はゴルキを咀ふ己れの聲に
よりて自ら救はれつゝあるのである。

◎況んやゴルキの作は今の我邦の無學なる批評家の雷同する如く、罪惡浮浪の

外に何物をも語らざる様のもては決して無い。若し欲するならば我邦人の如

きは是によりて多大の教訓と箴規とを受くることが出来る。

◎フォーマゴルデエフに描かれたるマヤキンの人生觀の如きは我邦人の大

多數にとりては殆ど理想に近いものであるかも知れぬ。若し彼等にしてそを一

讀するならばボシツクやツェルカツセを描いたる同一の人が如何にして是の如き人

物を寫し得たるかを驚かずには居られまい。ゴルキは決して無學者では無い。

活ける人生の知識に於ては如何なる文豪詩人も匹敵し得べき深大なる素養を
して居る。

◎試に見るが好い、ヨツホーフやルホフを通じて彼れが發表したる人生の批評

は今日の最高の知識に對して何等の遜色を認めざるものではないか。フォーマ

は或は彼れ自らの性格を現はして居るかも知れぬ。然しながらゴルキ其の人の

知解は當代思想界の最高潮を示めして居るものと見て決して大過なきことを我輩は信ずる。イリヤム・ロメツの甲板の上で商賈の團躰を指して生命の破壊者と罵倒したるフォーイヤは最早や知解の人に非ずして本能の人である。ゴルキが現代文明に對する大いなる反抗の氣焰として其の所謂野獸的性欲の自由を發揮したのである。吾人若し彼れに於て得る所あらむと欲せば彼れの長所の那邊にあるかを先づ考へなければならぬ。

◎早稲田の専門學校もいよ／＼先月より大學と改名した。名前は一枚の看板て如何様にも懸け換へることの出来るものであるが唯憂ふべきは其の名前に稱ふだけの實質である。我輩は早稲田大學當事者の功勞を多とすると共に是の大の前途に對して少からざる憂を懐くものである。

◎今の我邦に於ては書物の標題に新と云ふ字を附けなければ賣れ行きが悪いといふことである。大方其の爲であらう倫理新説とか新教育學とか最新經濟學であるとか云ふ様な標題が新刊の書には頗る多い甚しきに至つては新式佛敎講義など云ふ書目さへ見ゆるのである。

◎あゝ新らしい物は左程に貴まるべきものであるか。眞理は古いものであるとこそ聞け。何事も皮相の新しきに走りて珍奇是れ喜ぶは畢竟其の學風の輕佻浮薄なるの致す所である。實に歎はしき現象と謂はなければならぬ。

◎あらゆる學術は常に奴隸的のものである。問題は常に外より與へられる。彼れは是の與へられたる問題に對つて解釋を提供すればそれで好いのである。

◎問題の提供者は時としては自然である。又時としては天才である。學術は常に是れ二者の何れかの奴隸である。

◎迷信は世人が騒ぐほど左程怖るべきものではない。むしろ怖るべきは道學先生の固陋なる道徳説である。基督を十字架に上せたのも、ソクラテースに鴆毒を飲ませたのも、スピノザを迫害したのも、乃至はシベンハウエル、ニイチエを苦めたのも、皆是の道徳説の爲せる業だ。

◎昔は犠牲は少數の偉人に限られたが今や多數の凡人が是れに代ることゝなつた。彼等に口無きが故に世は平和に見ゆれども實は死滅に近づきつつあるのである。

◎迷信は力である。ダンバーの戦を人が出来事と考つたのに對し「是れ人事に非ず神事也」と怒りたるクロムエルは、恐らく當代第一の迷信者に相違無かつたであらうが、其の事業は天日と共に輝けるのである。日蓮は三災七難の佛讖を叫びて一世を警めたが、今日の學者などの眼には是れ程大なる迷信者は無からう。然しながら是の迷信の上に打立てられたる彼れの事業の如何ばかり偉大なりしよ。

◎我輩は斯ふ思ふのである。迷信と云ひ、眞信と云ひ、つまりはどちらでも好いので、唯必要なのは精神である。赤誠である、不惜身命の大勇猛心である。

◎今の人々は祈ることを忘れた。是れこそは今の世の最も大なる禍と謂ふべきであらう。

◎大いなる人となるの道は唯二つあるのみである。己れの小ささを悟るは其の一つである。己れの大きいなるを信ずるは他の一つである。前者は情により、後者は意による。彼れは攝受門、此れは折伏門。彼れは易行道、是れは難行道である。彼れは釋迦基督の教義にして、此れは奈破翁ニイチエの信條である。

◎人を脱して神となる、己れの小ささを悟る所以である。人のまゝにして神となる、己れの大きいなるを信ずる所以である。

(三十五年十一月)

標牛全集第二卷終

明治三十八年三月十日印
 明治三十八年三月十三日發
 明治三十八年三月再版發行
 明治三十九年四月五版發行
 明治四十二年四月十版發行

明治四十三年六月十一版發行
 明治四十三年十二月十二版發行
 明治四十四年十一月十三版發行
 明治四十五年四月十四版發行
 大正元年十月五日十五版發行

標牛全集第二卷
 上傳史及藝文
 定價壹圓五拾錢

編輯者 齋藤信策

發行者 大橋新太郎

印刷者 水谷景長

印刷所 博文館印刷所

發兌元

東京日本橋

博文館

東京市日本橋區本町三丁目八番地
 東京市小石川區久堅町百〇八番地
 東京市小石川區久堅町百〇八番地

(島製本)

文 學 博 士

故 高 山 林 次 郎 君 遺 著

樗 牛 全 集

全五冊 洋裝菊判 裝釘高雅 正價各壹圓五拾錢 送料各十二錢

第一卷 ● 美 學 及 美 術 史 傳 上
 第二卷 ● 文 藝 及 史 傳 下
 第三卷 ● 文 藝 及 史 傳 下
 第四卷 ● 時 勢 及 思 索
 第五卷 ● 想 華 及 消 息

樗牛博士識見一世を抜き學名一代に高し評論の筆に文壇を嚮導する事數年その間又倫理美術に關して斬新の提説を公にして學界に雄飛したり而して前後一貫常に社會人生の深義を求め晚年靈界の光明に接してより猛然として身を妙法の宣傳に委し三世の豫言者としてその短き一代を終れりこの時々の議論不朽の著作集めて此全集五冊の中にあり日本文明の將來と人生の光明とに焦慮する人士は此中に一條の大天火を見ん

發 兌 元

東 京 日 本 橋 本 町 三 丁 目

博 文 館

故 鳥 谷 部 銑 太 郎 君 遺 著

春 汀 全 集

全三冊 洋裝菊判 表裝華麗 正價各壹圓五拾錢 送料各十二錢

第一卷 第壹卷 明 治 人 物 月 旦 編 前 政治家月旦
 第二卷 第貳卷 明 治 人 物 月 旦 編 後 外交家、教育家、軍人、實業家、文士記者各月旦
 第三卷 第參卷 各 種 の 評 論 其 外 人 月 旦 他

故鳥谷部春汀氏の文品は世既に定評あり、殊に其人物月旦の技に至りては殆んど天下の絶品と稱せらる。今其浩瀚なる遺文中、最も世に喧傳したる人物月旦及び各種の評論を編輯し、三卷に分冊して治く江湖に薦む。

發 兌 元

東 京 日 本 橋 本 町 三 丁 目

博 文 館

文 學 博 士
姉 崎 嘲 風 君 編

文 樗 牛 編
文 人 は な り

全一冊 洋裝四六判 裝釘優美 正價 金壹圓 送料金十錢

挿書 十數葉及樗牛筆蹟書簡挿入

内 第一期◎憧憬の時代 第二期◎自信の時代
容 第三期◎煩悶の時代 第四期◎渴仰の時代

附 録 性格の人 高山樗牛

情趣思慕の青年時代より、自信の人、煩悶の人、信仰覺醒の最後に至るまで、樗牛氏一代の意氣感情を傳ふべき文章の粹を集めたるもの、全集以外の材料と編者の評論とを加へ、文に依つてその人を傳ふ、尙姉崎嘲風山川智應兩氏に依りて編れたる別冊「高山樗牛と日蓮上人」と相待ちて、現代超越の主旨を宣揚するは此の書にあり。

發 兌 元

東京日本橋本町三丁目

博 文 館

著原氏ルエウハンベヨシ
文 學 博 士
姉 崎 正 治 君 著

意 志 と 現 識 と し て の 世 界

全一冊 洋裝菊判 特製美本 正價 上卷金一圓八十錢 中卷金一圓六十錢 下卷金一圓八十錢 送料各十二錢

シヨ氏の哲學は近世思想とギリシヤ理想との融合、東洋思想と西洋哲學との連鎖。徹透の思想と剔抉の論議とを以て、高遠の理想を宣べ、寂靜の福音を傳ふ。その大著作は彼れが死後滿五十年の紀念として發刊せられたり。今や大哲の明文は茲に姉崎博士の流暢なる口語に依りて譯せられ、特に原著の論調語氣を寫すに勉められたれば從來哲學書は難解なりとの誤解もこの一書に依りて一掃せられん。出版者たる本館も、亦この廉價を以て不朽の傑作大譯書を世に提供するを以て敢て誇とせん。

發 兌 元

東京日本橋本町三丁目

博 文 館

東京帝國大學文學部教授

文 學 博 士
姉 崎 正 治 君 著

宗 教 と 教 育

全一冊 洋裝四六判 特製美本 正價金壹圓參拾錢 送料金十錢

内 容

一般の觀察。個人と社界。現實と理想。現世と彼岸。慈愛と權威。個人の信念と傳來の權威。日本の思想界。現代文明と宗教並に教育の缺陷。宗教と教育。勅教と國體と宗教。

附 篇 日本宗教の概観
西洋文明の由來
三教會同の觀察

個人と社會、國家、人道、現實と理想、諸方面より宗教と教育との問題を論究したる者。信仰の闡明、人生の哲理、現代社會の評論として、教化の大事を考ふる人の熟讀を煩はす。

發 兌 元

東京日本橋
本町三丁目

博 文 館

文 學 博 士
加 藤 立 智 君 著

宗 教 學

全一冊 洋裝菊判 函入美本 正價金貳圓五拾錢 送料金十二錢

著者は東京帝國大學を初め、公私の諸大學に宗教學を講ずる茲に年あり。今や十有餘年の蘊蓄を傾注して本書を成す。其富瞻なる資料は、之を廣く佛教基督教は勿論各民族の宗教史宗教心理學神話學人相學等の諸方面に求め、一々確乎たる事實の基礎に立ちて、歸納的に宗教の何にもなるかを研鑽究明し、歐米諸大家の學說を納れて而も著者一家の創見と明快なる斷案とに由りて、斯學界に一生涯を開けるもの則ち本書にして、眞に斯學界の寂寥を破り、曾て邦文にて出版せられたる宗教學書中、最も詳密を極むるものなり。殊に宗教學の研究に従はるゝ人士は勿論現下我國思想界の混戦期に際し其前途を患ふるの諸君子は、請ふ一本を備へて座右の指針とせられんことを。本書豈に啻に之を學生神官僧侶牧師教育家諸彦にのみ推奨すと言はんや。

發 兌 元

東京日本橋
本町三丁目

博 文 館

2/24/17
あ

幸饗 田庭原 露篁 伴村柿 先先 生生 訂校

文藝叢書

第一卷 忠臣藏文庫
 第二卷 椿説弓張月
 第三卷 西鶴文庫
 第四卷 道隆栗毛全集
 第五卷 俠客全集
 第六卷 演劇脚本集
 第七卷 忠義復讐傳
 第八卷 南里見八犬傳
 第九卷 南里見八犬傳
 第十卷 南里見八犬傳
 第十一卷 世話淨瑠璃名作集
 第十二卷 世話淨瑠璃名作集
 第十三卷 世話淨瑠璃名作集

發兌元 東京日本橋 博文館

藤島武二裝幀 全十洋裝術判 正價 壹圓 送料各
 橋口五葉 二冊 天金織美本 各金 十二錢

文藝の人の於ける其の性情を薫染し、其の氣質を陶鑄す。功もとより少く、あ
 らざる也。聖代泰平、文運隆昌、本館今茲文藝叢書を出版して第一期十二巻を發
 行す。外觀はたゞ賞を十々に求むるが如しと雖も、微意いさか補を風教に添
 へんと欲するなり。是に於て、鑑識を諸先生に仰ぎ、近古文藝の中に就きて、精
 を取り組を捨て、過多くして弊少きもの、破損の虞に遠ざからんを希ふ。印刷の
 魚の行無きを必し、用紙は佳良を極め、破損の虞に遠ざからんを希ふ。印刷の
 明より装釘の緻密に至るまで、皆一々心をを用る意を致し、實質の美を以て廣
 流布の語本に超みしめんと欲す。而して其價を低くして、江湖の購得に便して廣
 もの、また佳書の廣布を望むの意に出でずんばあらず。若しそれ本叢書の刊
 行によりて、山村水郭の人も容易に多数の書を得、繁劇忽忙の士も清英を寸暇
 受し、且や本叢書刊行の微意もまた酬はむ。

45

316^h

終